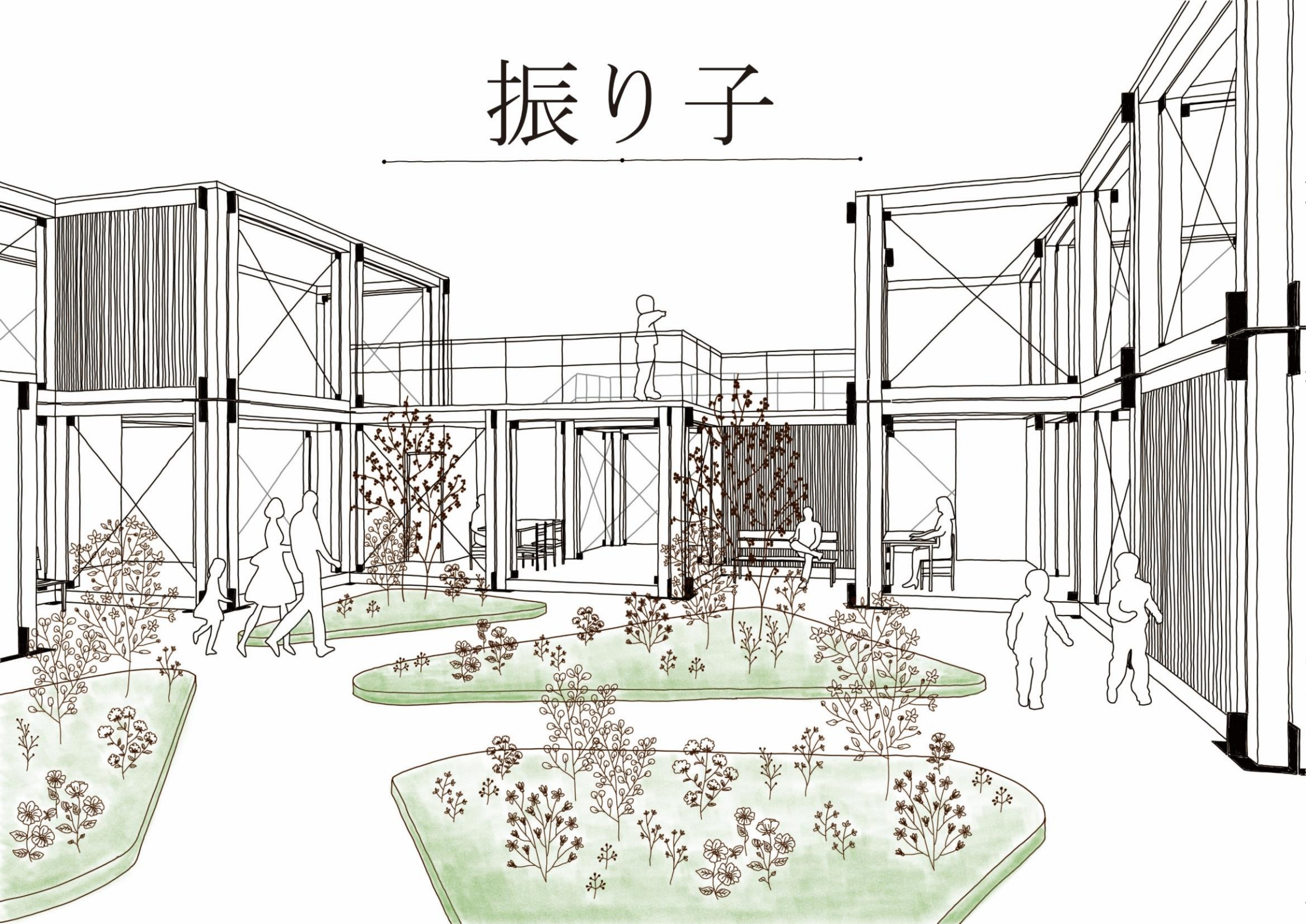
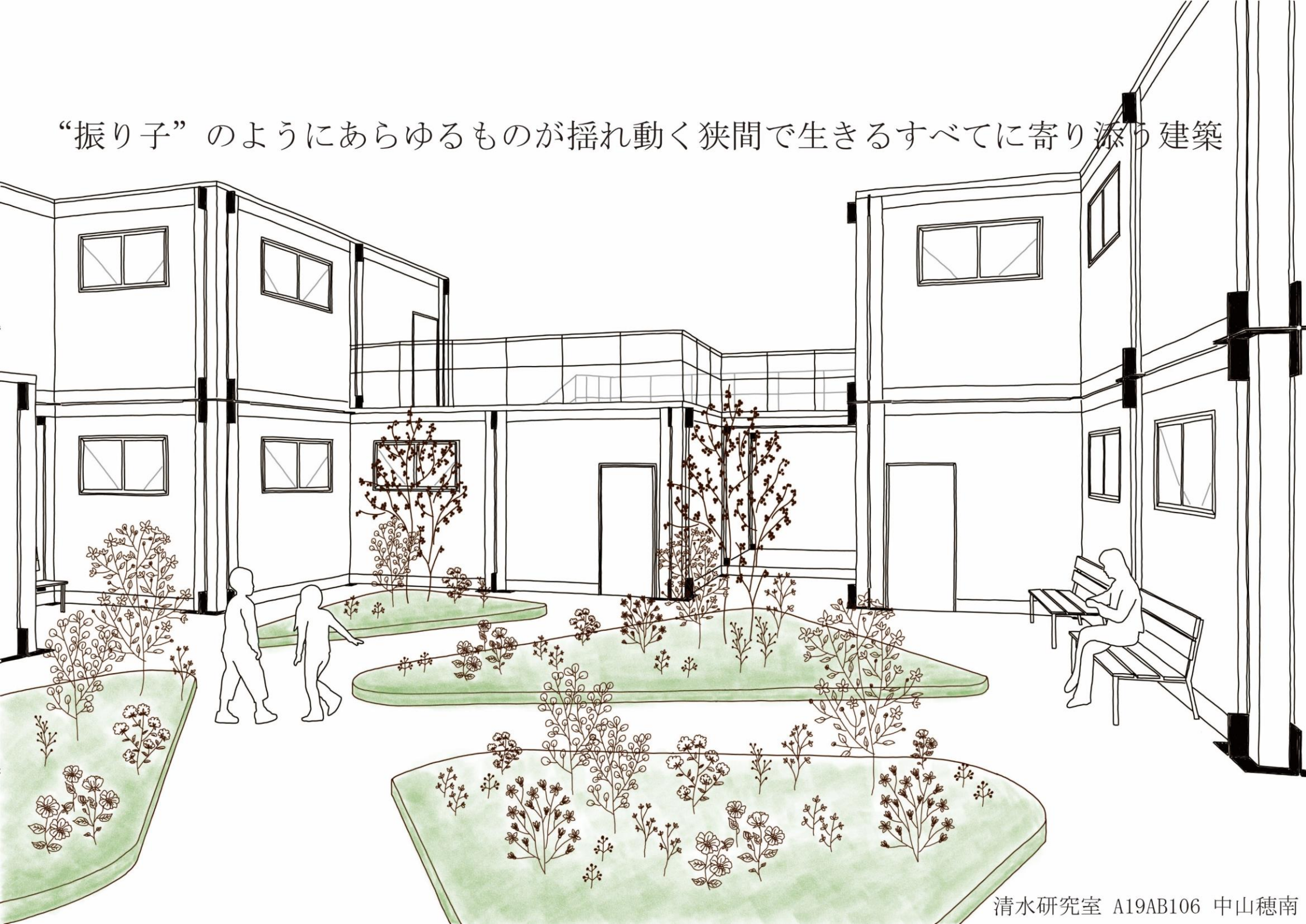


振り子



“振り子”のようにあらゆるものが揺れ動く狭間で生きるすべてに寄り添う建築



背景・目的

日本の避難所の生活環境が悪化 → 一時的な滞在場所であるはずが、長期間滞在

原因①

建設資材の調達や建設など仮設住宅の整備に時間がかかる

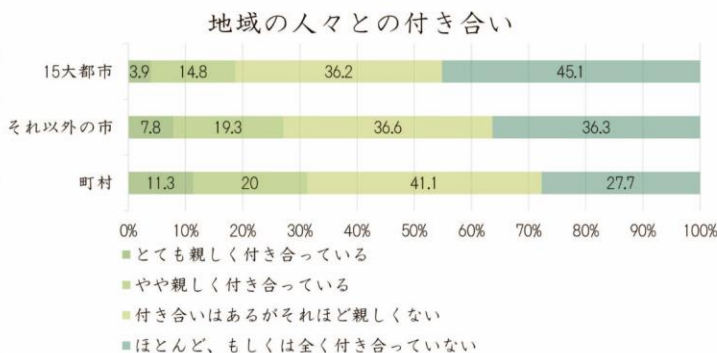
原因②

住み慣れた土地や地域コミュニティを離れる不安

応急仮設住宅の整備にかかる時間（災害発生後からの日数）

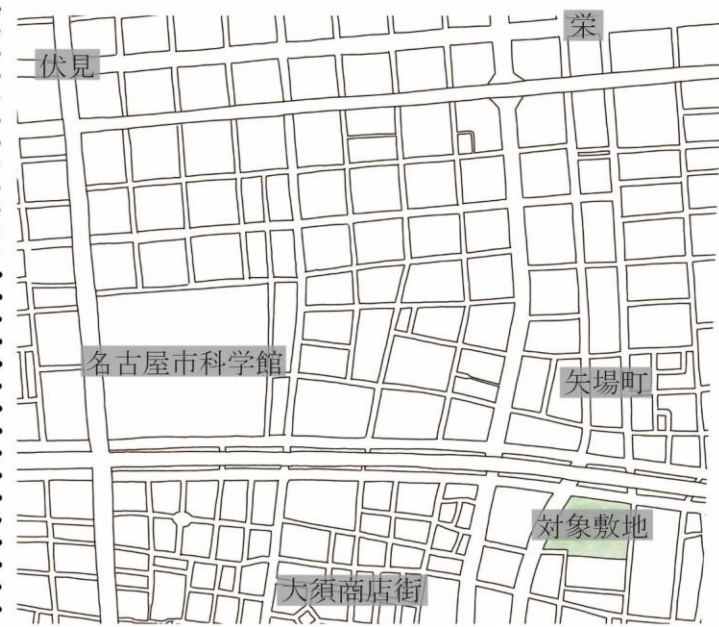
	着工	入居開始	すべて完成
阪神・淡路大震災	3日後	14日後	約7か月後
東日本大震災	8日後	21日後	約6か月後

都市部において常時から馴染みのある施設を仮設住宅に変化させることで、工期やコミュニティ上の問題解決を目指す



対象敷地

フラリエ（名古屋市中区）

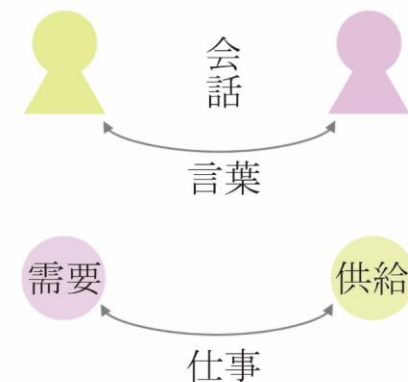


コンセプト

植物とともに“振り子”に寄り添い自宅にかえる

- “時の流れの振り子”に対応し、非常時には仮設住宅に変更、自宅敷地に移築可能
- 常時、非常時問わず花を咲かせる植物とともに人間が成長を続け、振り子に寄り添う

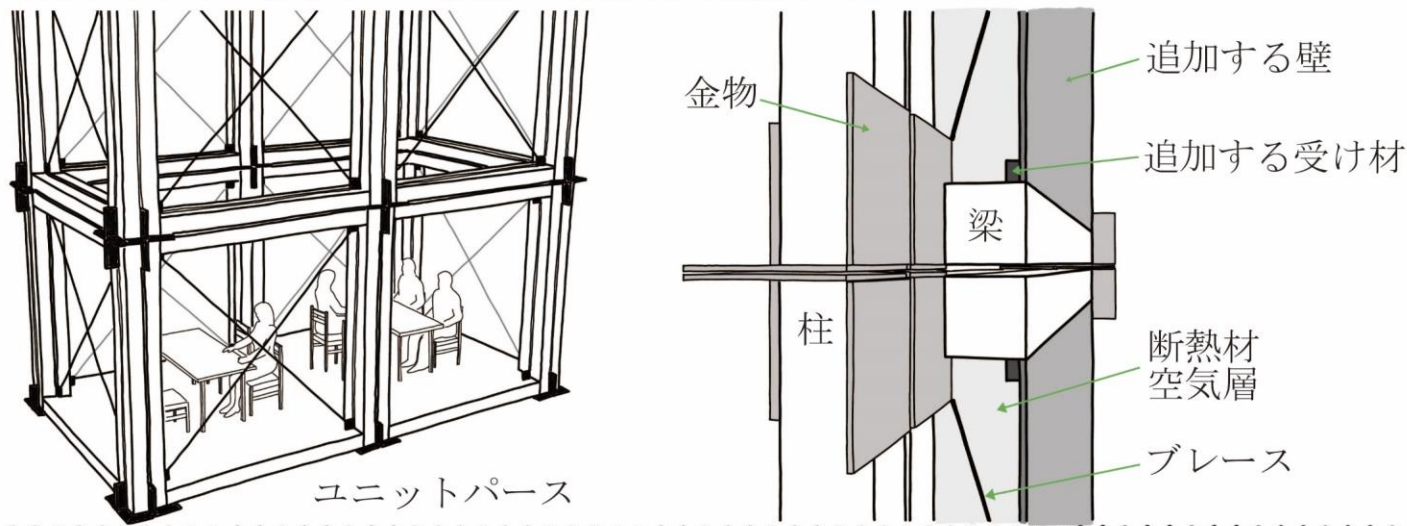
- 生きることは振り子の繰り返し -



建物	生活場所	自宅 / 設計施設	避難所	設計施設（仮設住宅）	自宅
	行動	設計施設が交流の拠点や居場所となる	設計施設に壁を追加	自宅の解体、修理 ユニットを移築し 家を建てる	自宅にユニットを追加、 自宅の建替え 新しい施設建設
時間軸	発災		7日後	1～2年後	

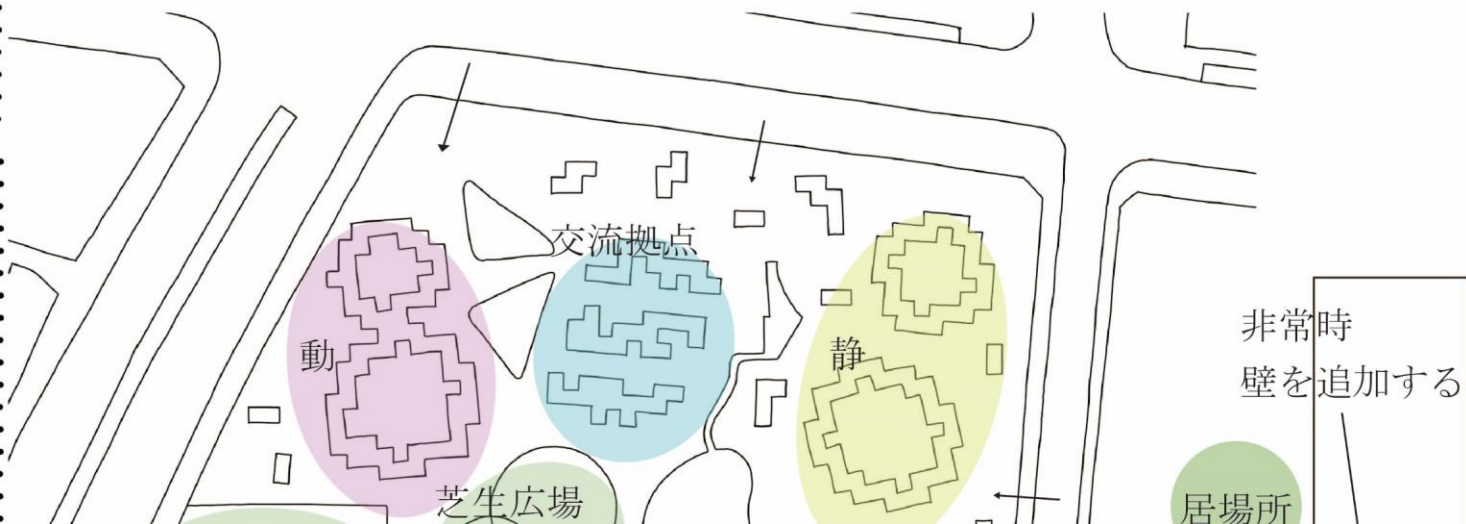
構造

モジュール式の木造軸組フレームを用いたブレース構造
 各部材の解体、再構成が容易で柱と梁が簡易的な接合となっており、ブレースを使用することで開かれた空間かつ耐震性を確保する



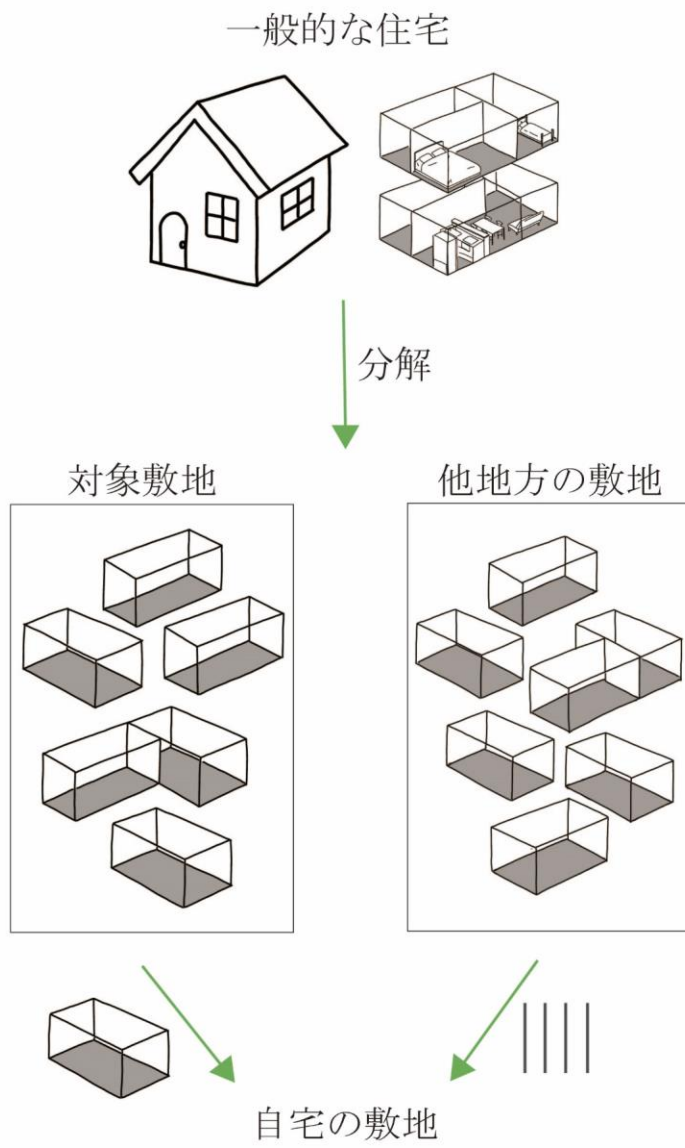
ゾーニング




敷地全体を「静・動・交流拠点」に分け、芝生の広場も設ける
 各ユニットをずらしながら建物平面を構成することで、常時は居場所を生み、非常時は隣と共通する壁面積が少ないため、音漏れや振動の低減につながる

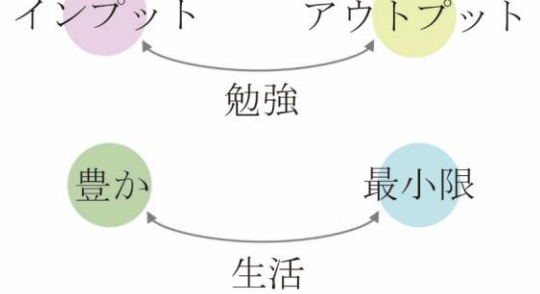


ダイアグラム

- 一般的な住宅を構成する要素をユニットに分解し、敷地内に配置
- 非常時は必要なユニットを自宅敷地に移築
- 大規模災害時は他地方の施設を解体、運搬、現地で再構成



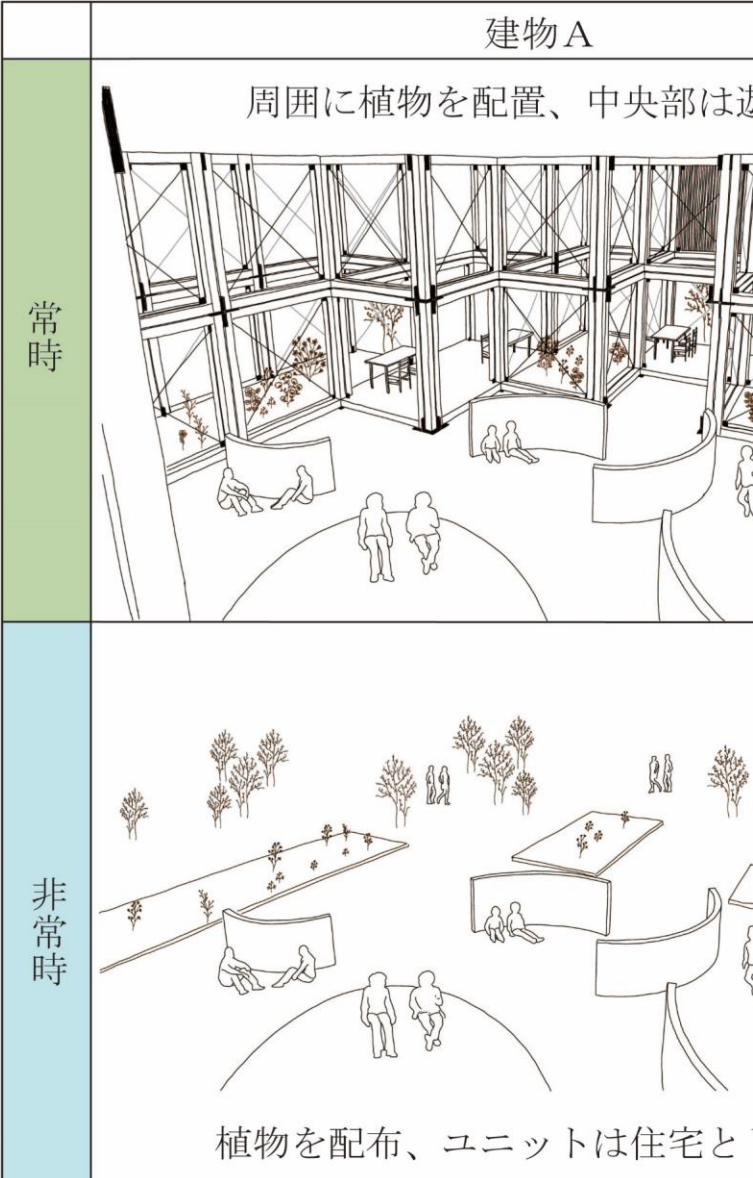
植物	 人々の癒し 植物の栽培を 通して交流	 各住戸に花を配布 花の水やりが生きがいや 交流を生むきっかけになる	 仮設住宅で育てた花を 自宅に持ち帰る 施設で 新たな植物を育てる
----	--	---	--

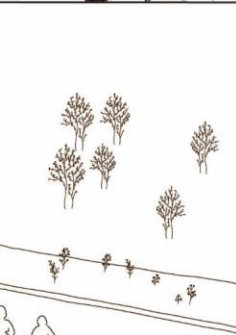
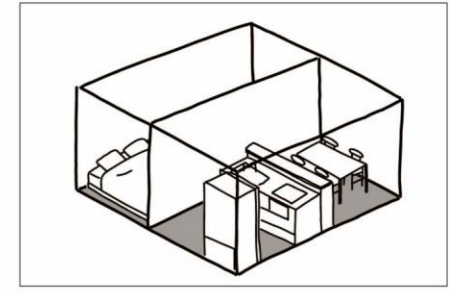
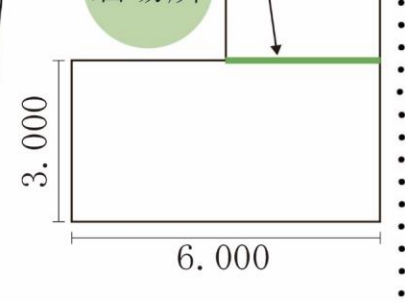
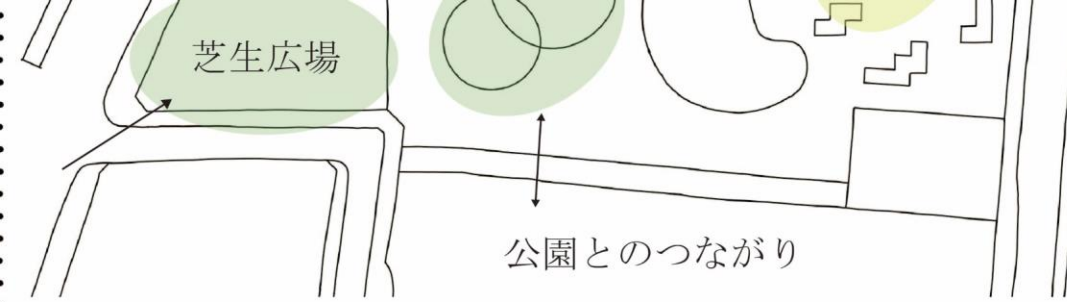


平面図・断面図



パース



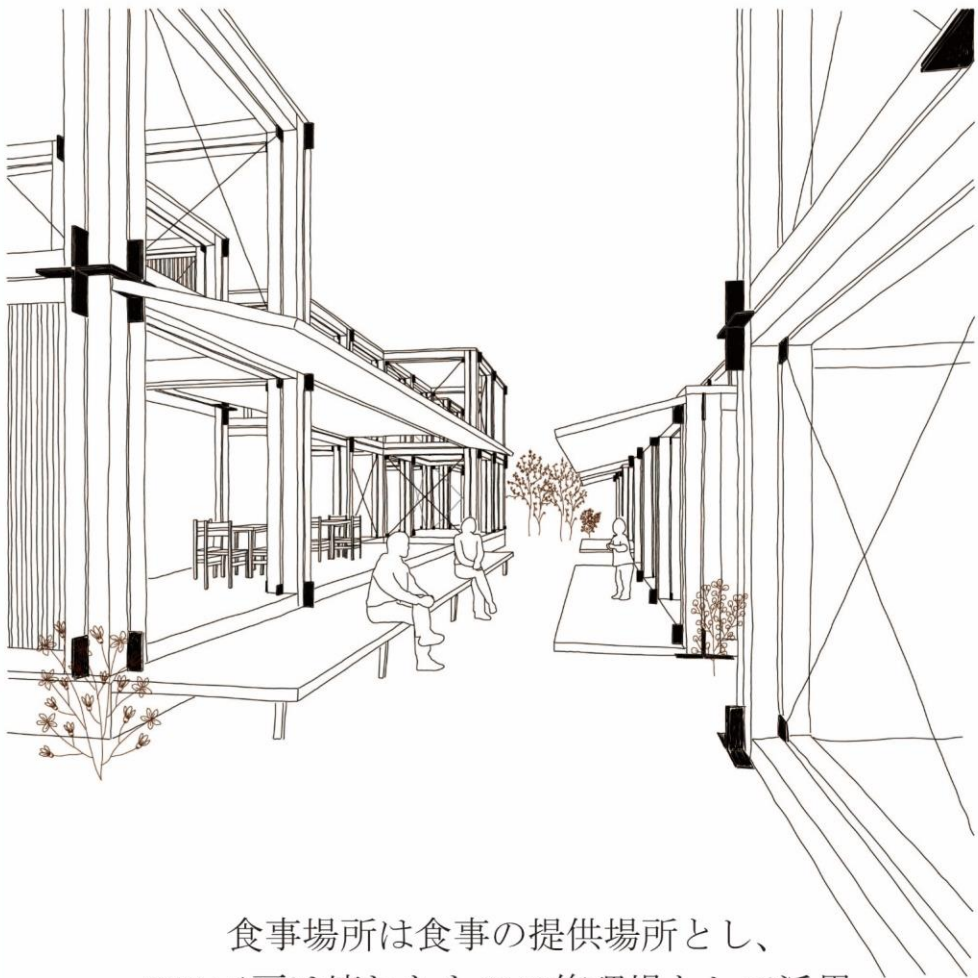


遊び場

として移築

建物B

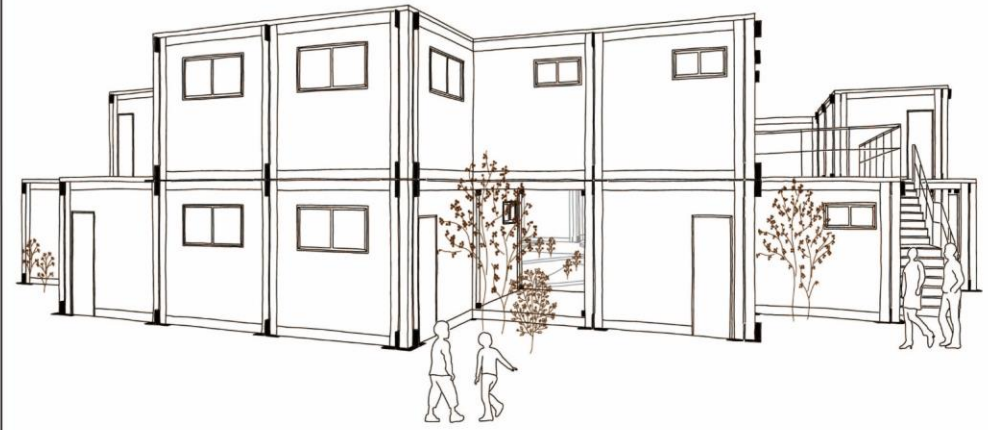
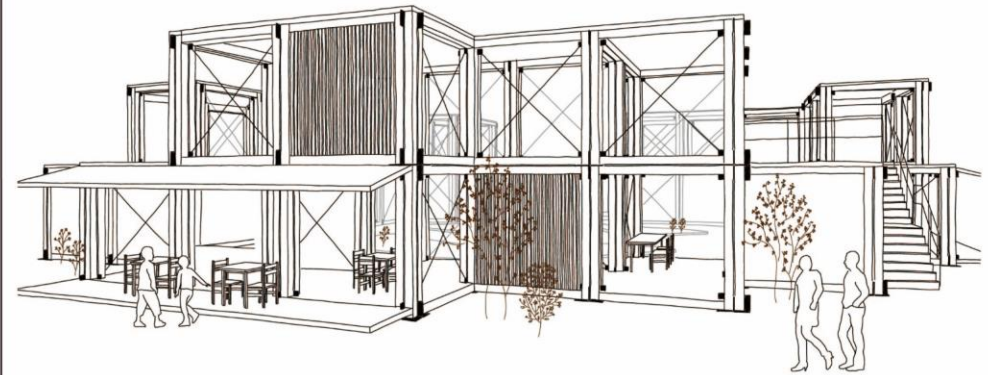
食事場所やDIY工房など常に交流の拠点となる



食事場所は食事の提供場所とし、
DIY工房は壊れたものの修理場として活用

建物C

勉強や仕事の用途に利用



中央の植物は残し、仮設住宅とする